

特集 『日本外交文書』80年

『日本外交文書』80年に寄せて

―二国間外交文書から多元的国际関係文書へ―

東京大学名誉教授・日本学士院会員 三 谷 太一郎

『日本外交文書』が閲した80年は、ちょうど私自身のこれまでの人生80年と重なっている。戦後の昭和二二年三月以来の『日本外交文書』が『大日本外交文書』（第一巻第一冊、日本国際協会）として創刊されたのは、私がこの世に生を享ける三カ月余前の昭和十一年六月二二日であった。続いて同年一〇月一四日に同第一巻第二冊が刊行されている。いずれも革装丁本であり、私が見ることができた東京大学法学部所蔵本は現在では背表紙などの損傷が甚しいが、これらは当時外交史の教授であった神川彦松法学博士によって寄贈されたものである。

このような革装丁本は、遠く遡れば、明治十一年一〇月に刊行された岩倉具視を特命全権大使とする使節団の見聞の記録である久米邦武編『米欧回覧実記』（第一編・第二編、太政官記録掛刊行）も同じであり、装丁については『大日本外交文書』はその先例を踏襲したのかも知れない。内容的にも、『米欧回覧実記』は外交記録の豊かな実質を備えたものであり、『大日本外交文書』の事実上の先駆けといってもよ

いように思う。

ところで明治元年分の外交文書を収録した『大日本外交文書』第一巻（第一・第二冊）には、その巻頭に「明治元年正月十日 大政復古布告ノ国書」が掲げられている。それには当然に「従前条約 雖用大君名称 自今而後 当換以天皇称」の一文が挿入されている。

さらにそれに続いて掲げられているのが、明治元年三月一四日付の明治天皇の親書の形をとった国民向けのメッセージである。「億兆安撫 国威宣布ノ御宸翰」がそれである。それには新たに目覚めた天皇の政治的主体性が強調されている。それには次のように書かれている。

「今日ノ事、朕自身骨ヲ勞シ、心志ヲ苦メ、艱難ノ先ニ立、……治蹟ヲ勤メテコソ始テ天職ヲ奉ジテ億兆ノ君タル所ニ背カザルベシ」

またそれと同時に、天皇統治の前途への天皇自身の不安も隠されている。宸翰には「今日朝廷ノ尊重ハ古ヘニ倍セシガ如クニテ朝威ハ倍衰ヘ上下相離ル、コト霄壤ノ如シ カ、ル形勢ニテ何ヲ以テ天下ニ君臨センヤ」と叙せられている。

このような自負と不安とが異例にも天皇の外交文書への直接的登場をもたらすこととなった。明治一二年八月一〇日に行われた、折から来日中のユリシイズ・S・グラント元米国大統領との会見記録がそれである。グラントは岩倉使節団訪米中の現職の大統領であり、南北戦争において北軍を勝利に導いた軍事的英雄であった。岩倉使節団一行も在米中、グラントが南軍の将ロバート・E・リーと対決し、南北戦争の帰趨を決したヴァージニア州アーリントンの旧戦場におけるグラント出席の「招魂祭」に参会している。おそらく来日したグラントと明治天皇との会見を用意したのは当時の右大臣岩倉であったと思われる。会見記録が『明治天皇紀』の他に、岩倉の伝記である『岩倉公実記』にも収められているのは、そのことを示唆する。

この会見記録の歴史的意義は、明治天皇がグラントの勧告によって、不平等条約下の日本の進路について具体的な指針を得たことである。それは日清不戦と非外債政策である。しかもそれが天皇の信条に止まらず、少なくとも日清戦争前(日本の植民地帝国化前)の自立的資本主義を追求する日本の政治的経済的な対外政策の基本線を形成したことである。

この会見記録は、不平等条約下の明治国家の歴史的特質(特にその政治的経済的ナショナリズム)についての私自身の理解に至大な影響を与えた(拙著『ウォール・ストリートと極東』の第一部「明治国家の経済ナショナリズム」参照)。これが『日本外交文書』第二二巻に収録されたのは、対日占領下の一九四九年であったが、当時の日本には、

戦後日本の出発点を日清戦争前の明治日本に求めようとする考えが一部の識者や宮中関係者の間にあり、この会見記録はその考えに沿っていたと思われる。

明治天皇の先例と同じく、非外交官が実質的な外交的役割を担って外交文書に登場し、しかも第一次大戦後の東アジアの国際政治に大きな影響を及ぼした事例が、一九二〇年当時の井上準之助日銀総裁とウォール・ストリートの最有力投資銀行モルガン商会の代表者トーマス・ラモントとの会談記録に見られる。これは大正九年分の『日本外交文書』第二冊上巻に収録されている。この会談記録もまた、ワシントン体制の歴史的特質についての私自身の理解に決定的な影響を与えた史料である(拙著、同上、第Ⅱ部「国際金融資本とワシントン体制」参照)。

第一次大戦後、パックス・ブリタニカといわれる帝國的な覇権体制の崩壊に伴って、多極化し、多様化した「国際社会」の現実に対応しうる新しい学問的アプローチ(「国際政治学」)の必要が唱えられた。そもそも今日頻用される「国際社会」という言葉自体が登場したのは、第一次大戦後のこの時期である。それは本来、主権国家の集合というような漠然たる概念ではなかった。それは国家以外のさまざまな目的集団が国際政治を動かす主体として登場し始めることによって生じた状況変化を示す概念である。それは国際関係の多元化である。そのような「国際社会」化は今日アナキー化をも伴いつつ、グローバルな規模で展開している。『日本外交文書』の今後の課題もまた、二国間

関係を前提とした「外交史」のための史料編纂に止まらず、必ずしも職業外交官のみが登場しない多様な分野の問題が錯綜する複雑系としての多国間関係や多元的国際関係の現実の解明に役立ちうる史料編纂にも及ぶことになるのではないだろうか。